

直達の今經を頂ている、薄縁の佛を去つて親縁の佛に結ばれた、難道を簡んで易道に導かれた。是の喜び、此の大恩を思ふなら速時自己の問題に接觸する、吾々は自分に尤も近く尤も親しく説かれたそれを、高く遠く疎にしながら還て自己を陥れ社會と分離して來た。自分は先づ自己を呼び覺さねばならぬ。そして自分の問題を檢べねばならぬ。吾々の第一の義務は是以外に何もない、眞個自己を思ふ人に、何ぞ他を棄てたり、陥れたりし得やうや、救済は自己より初まるのである。自己の救済が同時に他の救済である『一人の成佛は一切衆生の成佛』とは是れである。徒に他に煩はさるゝ

人格中心の研究法

一、矛盾の生活 吾々の思想と實生活とは常に二元的の傾向を帯びてゐる。吾々はそれが何よりも苦痛で堪われない。一方には頭の中に神を慕ひ、信仰を求め、道徳を思ふ。けれどもそれが一として實生活に表現された例しがない。却つて吾々の實生活は、その時々々の衝動に左右せられて、間々思はぬ行爲を敢てして

より吾々は先づ自己と解決せねばならぬ。そして自己に尤も親しい相應しい何者かを握らねばならぬ。それあつて後、生ある宗教と宗學とか發生するのである。我祖の教も我の問題から初まつた『而に日蓮は日本國安房國と中國に生じて候しが、民の家より出でゝ頭をそり袈裟をきたり此度いかにもして佛種をも植ね生死を離るゝ身とならんと思て候し程に云云』とは、千古不磨の妙文ではないか。此所聖誕の賀筵に近て自分はかうした深い強い感を得た。そして中心から喜に満された。嗚呼あの御艸庵殿として見そなはず常在殿!!!

白 風

おるのである。又それと反對に、他方には渾々として人に向つて神を説き、信仰を勧め、道徳を示す。けれどもそれが必ずしも衷心からの思想の表現ではない。却つて吾々の頭は往々にして如何に物欲を充たすべしかに就て滿されてゐる時が多い。如慙く吾々の思想と實生活とは、常に矛盾しておるのである。恐らくこれ

は有史以來誰れでも自分を知つた時、最初に感じた問題であつて、而かも亦未解決のまゝ、最後まで残つた問題であらうと思ふ。けれども吾々はどうしても此問題を、未解決のまゝ最後まで残しておくとは出来ぬ。何故ならば、此問題の残つてゐる限り、吾々は折にふれ事に従つてその矛盾に泣かねばならぬからである。殊に吾々の如き形式的生活を送るものには、公然と二元的生活を送るゝの出来ぬため、衝動欲を無理に壓迫して、純潔なる思想の表現的生活を送るかの如く装ふことがある。けれども其等の物欲は、不識の間、間々内酔して終には神、信仰、道德等に關する純潔なる思想をも化膿し、最后にはそれが全生活の上に破裂して根底より自己を汚がすことが無いとも限らぬ。こゝいふ意味からしても、此問題は是非解決しておかねばならぬ問題である。

二、その原因 如慙き二元的生活の依つて来る所以には色々の原因があるであらう。或は意志の薄弱なるに依るもの、或は生理的の欠陥より来るもの、或は四圍の境遇に餘儀なくさるゝもの等それである。けれども今吾々は、殆んど吾々の前半生の總てであつた思想的生活の方面から、その原因を探つてみたいと思ふ。

吾々は先づ第一吾々自身に向つて問ふてみねばならぬところがある。それは何かと云ふに、吾々の今迄の研究方針は果して正鵠を得たものであつたかどうかといふとこれである。併かし吾々は不幸にして之に否と答へねばならぬ。何故ならば、吾々の今迄の研究方針は、唯だ學問の爲めの學問であつて、徒らに思想から思想へと涉り歩いたに過ぎぬからである。そして其間最後の目的に價ひする其大思想家の人格にまで深く突き入る處がなかつた。例へば天台大師の教學を研究する時、玄文の二部には十年の歳月を費しても、止觀の研究には、僅かに一二年の時をしかかさぬといふ有様であつた。然るに大師の全人格は、却つてその止觀に眞面目を顯しておるのではあるまいか。吾々の研究はそれを知りつゝ閑却してゐた。又祖書研究に之を見る時は、成程多くの學者は直に本尊鈔にゆく、けれどもその本尊鈔の研究は、徒らに註書の爲めに煩ひされて、その結果註者の面影に祖師の大人格は間々隠されてしまつた憾みがある。従つて吾々は直に祖師の大人格に接することが困難であつた。思ふに總て物事は人格と人格との接觸によつて、そこに新しい力が生れてくる。吾々は實にその力が欲しいのである。その力によつて自己

の小人格を高め、實生活を統一してゆきたいと熱望しておるものである。然るに吾々の今迄の研究方針は、徒らに思想の取り扱ひにのみ孜孜として、更に進んでその奥に閃いてをる人格の面前にまでハタと突き進むことを忘れてゐた。こんな事では、よし百年勉強してもそれは單に物識りと云ふに止まつて、人間としての自分には何等の交渉をも持たぬものになつてしまふ。偉人の人格を宿さぬ思想が、いくら頭の中にあつても、それに表現力のないのは、寧ろ當然のことではあるまいか。こふいふ無意義な研究の續く限り、吾々は永久思想と實生活との二元的矛盾に苦しまねばならぬ。

三、吾々の採るべき道 如慙き二元的矛盾の調和を計るには、たゞ向後の研究的態度を、人格中心の研究的態度に改むるより外はない。換言すれば、祖書を忘れて註者の義論に囚はるゝ純思弁的態度から脱却して直に祖意を衝き、祖師の大人格に迫るゝ積極的研究の方法を採らねばならぬ。この意味に於て吾々は、混沌たる時代の吾學界に向つてこう叫びたい。曰く、汝若し統一ある一元的生活を送らうとするならば、何等の條件なく、直に祖文に歸れ、そして更に復た法華經に歸れど。祖文に歸り法華經に歸つて専心釋迦及び祖

師の大人格に衝き入る時、吾々の研究には初めて釋迦及び祖師の生命を宿すことが出来る。この生命ある思想によつて表現せられた實生活こそ、眞に思想と何等の矛盾なき實生活となるのである。此時吾々の思想と實生活とは、不離の關係を結んで、一は吾々自身の人格の内容となり、他はその外形となつて、茲に吾々は統一ある人格を得て矛盾なき一元的生活を送ることが出来る。人格中心の研究！これ吾々の採るべき唯一つの新路である。

四、眞の宗教的生活 この方法によつて進む時、少くとも自分一個の全生活には、何等の矛盾も無いことになる。けれども社會は果してこの生活を認むるか如何うか、それを社會に訪ふてみる必要がある。若し社會がこの生活（或は社會に逆行する時もあらう）を、充分價值あるものとして尊敬するならば、此時吾々の全生活は、個人的にも社會的にも完全した、眞の宗教的生活となり得るのである。

